

『吾輩は猫である』の二つの逸話の材源について ——アイスキュロスの死とアグノディケー——

五之治 昌比呂

はじめに

夏目漱石の『吾輩は猫である』（明治 38-39 年（1905-1906）、以下『猫』と略記）には古代ギリシア・ローマに関する言及が多く見受けられる。本稿はそのうちの二つを取り上げ、その材源を探ろうとするものである。ひとつはアイスキュロスの死に関する逸話、もうひとつはアグノディケーというアテーナイの女性への言及である。

I アイスキュロスの死の逸話

『猫』第八章（明治 39 年（1906）1 月 1 日発行の『ホトトギス』第九巻第四号に発表）に次のような箇所がある。猫の語りの部分であり、イスキラスとは悲劇詩人アイスキュロスのことである¹。

昔し希臘にイスキラスと云ふ作家があつたさうだ。此男は学者作家に共通なる頭を有して居たと云ふ。吾輩の所謂学者作家に共通なる頭とは禿と云ふ意味である。何故頭が禿げるかと云へば頭の營養不足で毛が生長する程活気がないからに相違ない。学者作家は尤も多く頭を使ふものであつて大概是貧乏に極つて居る。だから学者作家の頭はみんな營養不足でみんな禿げて居る。偕〔さて〕イスキラスも作家であるから自然の勢禿げなくてはならん。彼はつるつる然たる金柑頭を有して居つた。所がある日の事、先生例の頭一頭に外行も普段着もないから例の頭に極つてゐるが一其例の頭を振り立て振り立て、太陽に照らしつけて往来をあるいて居た。これが間違のもとである。禿げ頭を日にあてゝ遠方から見ると、大変よく光るものだ。高い木には風があたる、光かる頭にも何かあたらなくてはならん。此時イスキラスの頭の上に一羽の鷺が舞つて居たが、見るとどこかで生捕つた一疋の亀を爪の先に攫んだ儘である。亀、スツ

¹ 以下、漱石の著作の引用は 1993～2004 年刊行の岩波書店版『漱石全集』を用いる。漢字は適宜現行のものに改め、ふりがなは必要なもののみ〔 〕に入れて残し、あとは割愛する。

ボン杯は美味に相違ないが、希臘時代から堅い甲羅をつけて居る。いくら美味でも甲羅つきではどうする事も出来ん。海老の鬼殻焼はあるが亀の子の甲羅煮は今でさえない位だから、当時は無論なかつたに極つて居る。さすがの鷺も少々持て余した折柄、遙かの下界にぴかと光つた者がある。その時鷺はしめたと思つた。あの光つたものゝ上へ亀の子を落したなら、甲羅は正しく砕けるに極はまつた。砕けたあとから舞ひ下りて中味を頂戴すれば訳はない。さうださうだと覗〔ねらい〕を定めて、かの亀の子を高い所から挨拶もなく頭の上へ落した。生憎作家の頭の方が亀の甲より軟らかであつたものだから、禿はめちやめちやに砕けて有名なイスキラスはここに無惨の最後を遂げた。それはさうと、解しかねるのは鷺の了見である。例の頭を、作家の頭と知つて落したのか、又は禿岩と間違へて落したのか、解決し様次第で、落雲館の敵と此鷺とを比較する事も出来るし、又出来なくもなる。主人の頭はイスキラスのそれの如く、又御歴々の学者の如くぴかぴか光つては居らん。

(『全集』第一巻、pp. 323-325)

落雲館という私立中学校の生徒たちが苦沙弥先生に対していたづらをする。近くで野球をしてボールを先生の家の方敷地に飛ばし、そのたびにボールを取りに垣を越えて敷地に入ってくるのである。このような文脈でアイスキュロスの逸話が挿入される。この鷺は作家の頭と知って亀を落としたのか、それとも岩と間違えたのか。それは、生徒たちがいたづらをするのが苦沙弥先生を悩ませてその頭を禿げさせるためなのかという疑問と重なるというのである。

アイスキュロスの死にまつわるこの奇妙な逸話は古くから知られているものである²。現存の文献で最も古い言及は、ストバイオス『詞華集』4.98.8に引用されている前3世紀前半の風刺詩人ソータデースの詩の一節であるが、アイスキュロスが執筆しているところへ亀が落ちてきたという簡単な言及にとどまっている。この逸話の一般的な話形を伝える古いものは紀元後1世紀前半のワレリウス・マクシムス『著名言行録』9.12・異国部2であり、他にはブリニウス『博物誌』10.7、アイリアノス『動物奇譚集』7.16などにも言及がある。書かれた時期は不明だがメディチ家写本にある『アイスキュロス小伝』にもこの話は出ている。これらはどれもそれほど長くない文章で、鷺が詩人の禿頭を岩と間違えて亀を落下させたことが語られ

² この逸話の成立過程については中務（1996）pp. 170-174 参照。

ている。それと比べると漱石の文章はかなり拡充されているが、基本的な事項に大きな違いはない。

漱石はこの逸話をどこで知ったのであろうか。その材源については昔から議論がある。まず、1965年刊行の岩波書店版『漱石全集』第一巻の当該箇所への注解は、メディチ家写本の伝記にこの逸話が書かれていることを指摘し、加えてイソップ寓話の類話を紹介している（pp. 593-594）。もちろんそれが漱石の材源だとまでは言っていない。

次にこの問題を考察したものとして、淮陰生の「一月一話」がある。淮陰生とは匿名の筆者であるが、ほぼ間違いなく英文学者の中野好夫であると考えられている。「一月一話」は、もともとは岩波書店の『図書』に連載されていたエッセイで、後に岩波新書として出版され、さらに『完本 一月一話 一読書こぼればなし』という単行本にまとめられた。「アイスキュロスと亀と漱石」と題した1975年4月の『図書』の稿では、まず『漱石全集』の注解にあるメディチ家写本からという可能性を否定している。次にサー・トマス・ブラウン（Sir Thomas Browne, 1605-1682）を通じて知ったという可能性を挙げている。ブラウンの『俗謬論』（*Pseudodoxia Epidemica*, 1646-1672）の第7巻にこの逸話が出ていることを指摘し、「また別書によると」として、この話が哲学者デーモクリトスに遡ることを紹介している³。最後に漱石蔵書中にブラウンの全集があることを指摘した上で、なおかつブラウン起源説は怪しいと結論づけている。漱石がブラウンをそれほど熱心に読んでいた証拠が見つからないから、というのが理由である。さらに、蔵書リストには英訳本のアイスキュロス集もギリシア劇関係書も見あたらないので⁴、はたしてどこから漱石がこの話を知ったのか興味がある、と文を結んでいる。

このエッセイには読者からすぐに反応があり、筆者淮陰生の訂正が「補註」として単行本に収録されている。まず、漱石がブラウンをあまり読んでいなかったのではないかと書いたことを訂正している。漱石の『三一郎』（1908）ではブラウンの『ハイドリオタフヒア』（壺葬論、*Hydriotaphia, Urn Burial*, 1658）について詳しく述べられているからである。また、木村毅からウォルター・サヴェッジ・ランダー（Walter Savage Landor, 1775-1864）の書簡体小説『ペリクレスとアスペシア』（*Pericles and*

³ シンプリキオスの伝えるデーモクリトス断片 A68DK のことである。ただし、そこには驚が禿頭に亀を落下させることが述べられているのみで、アイスキュロスの名はない。

⁴ 後述するように漱石の残された蔵書の中にはギリシア劇関係の本はある。

Aspasia, 1836) が材源ではないかという指摘があったことを伝えている (同年の『図書』8月号に掲載)。

次に、1993年刊行の新しい岩波書店版『漱石全集』第一巻の注解は次のように述べている。「この逸話は、漱石の蔵書中にある『古代ギリシア・ローマ伝記神話地理辞典』のアイスキュロスの項に一説として簡単に紹介されている」(pp. 630-631)。もちろんこれが材源だとまでは言っていない。この辞典については後で詳しく述べる。

中務(2011)は、この逸話の古代における典拠の紹介、逸話誕生の経緯の推測に加え、漱石の材源についても考察し、ブラウン説に傾いている。

現在、漱石の蔵書に関する基本的な作業が整い、こうした問題を調べるにはたいへん便利な環境になっている。漱石の旧蔵書は東北大学附属図書館に「漱石文庫」として所蔵されており、書籍データがデータベース化されているので、基本的な情報はウェブ上で検索することができる。また、漱石は英国留学中から自分が購入した書籍の情報をノートに記して残しているが、この翻刻が岡三郎氏と飛ヶ谷美穂子氏によって行われ、現在すべての情報が簡単に参照することができる⁵。

そこで、アイスキュロスの逸話のために漱石が参照した文献が「漱石文庫」の旧蔵書中にあるとしたらという前提で、その可能性のあるものを探ってみた。もちろん蔵書以外の本を参照した可能性もあるわけだが⁶、その場合実証は困難であり、可能性の一つとして指摘できるととどまるだろう。例えば、木村毅が指摘したランダーの『ペリクレスとアスペシア』にはたしかにこの逸話が出てくるが、漱石文庫にはこの本はなく「図書購入ノート」にも見つからない。

管見の限りだが、漱石の蔵書の中では、先行研究で指摘されているものも含めて次の五点にこの逸話への言及が見つかった。

(1)『ラブレール作品集』の『パンタグリユエル物語』第4巻第17章

漱石蔵書では、F. Rabelais, tr. by Sir T. Urquhart & Motteaux, *The*

⁵ 岡(1981)、同(1986)と、飛ヶ谷(2002)の「漱石自筆図書購入ノート 翻刻」によってすべての情報が揃った。

⁶ 漱石の『自転車日記』(1903)の中に、調べ物のためにブリティッシュ・ミュージアムに出かけることがあるかと訊かれた漱石が「あすこへは余り参りません、本へ矢鱈にノートを書き付けたり棒を引いたりする癖があるものですから」(『全集』第十二巻、p. 63)と答える一節がある。もちろん、まったく図書館の本を利用しなかったわけではないであろうが、比較的少なかったのは間違いないであろう。

Works of Francis Rabelais, 2 vol., London, 1863-1867 の第 2 巻の p. 253.

(2) アーサー・トムソン『動物の生態の研究』

漱石蔵書では、J. Arthur Thomson, *The Study of Animal Life*, Murray, London, 1901 の p. 118.

(3) サー・トマス・ブラウン『俗謬論』第 7 巻第 18 章

Sir Thomas Browne, *Pseudodoxia Epidemica*. 漱石蔵書では Simon Wilkin ed., *The Works of Sir Thomas Browne*, 3 vol., George Bell, London, 1888-1894 の第 2 巻に所収。該当箇所は pp. 279-280.

(4) ライオネル・バーネット『ギリシア劇』

漱石蔵書では、Lionel D. Barnett, *The Greek Drama*, Dent, London, 1900 の p. 20.

(5) サー・ウィリアム・スミス編『古代辞典』の「アイスキュロス」の項

漱石蔵書では、Sir William Smith (G. E. Marindin) ed., *A Classical Dictionary of Greek and Roman Biography, Mythology, and Geography*, Murray, London, 1899 の pp. 27-28.

このうち(1)と(2)は漱石が英国留学時代に購入したものであるが、そこにはアイスキュロスの禿頭への言及がないため、材源の可能性はない⁷。以下、それ以外の三つを順に検討していきたい。

(3) ブラウン『俗謬論』

淮陰生が挙げていた『俗謬論』である。アイスキュロスの逸話は次のように紹介されている。

It much disadvantage the panegyrick of Synesius, and is no small disparagement unto baldness, if it be true what is related by Aelian concerning Aeschylus, whose bald pate was mistaken for a rock, and

⁷ 漱石は Chubb 編纂のモンテーニュ『エッセー』の英訳本を留学中に購入し所蔵していた（「図書購入ノート」の 259 番）。『エッセー』第 1 巻 20 章にはアイスキュロスの死への言及があるが、この英訳本には収録されていないようである。なお、モンテーニュの記述にはアイスキュロスの禿頭への言及がない。

so was brained by a tortoise which an eagle let fall upon it. Certainly it was a very great mistake in the perspicacity of that animal. Some men critically disposed, would from hence confute the opinion of Copernicus, never conceiving how the motion of the earth below should not wave him from a knock perpendicularly directed from a body in the air above.

漱石は三巻本のブラウン全集を所有していた。飛ヶ谷氏によれば、購入時期は熊本五高教授時代の明治 30～31 年（1897-1898）と考えられる（よって「図書購入ノート」には記載はない）⁸。このブラウンの記述は、情報量は少ないが漱石の材源として不足はないであろう。

このブラウン全集の漱石手沢本を見てみたところ、本にはページが切れていない「アンカット」のところが少しだけあったが、当該箇所は「アンカット」の状態ではなかった。したがって、漱石が目を通した可能性はある。ただし、逸話の箇所に書き込みや線引きはなかった。

それでは、材源としての可能性はどの程度のものなのか。淮陰生の補注で述べられているように、漱石は『三四郎』でブラウンの『ハイドリオタフヒア』を詳しく取り上げている。この作品はブラウン全集の第 3 巻に入っているが、手沢本を見るとこの作品にはかなりの線引きや書き込みが見られる⁹。それに対して、『俗謬論』の方には書き込みも線引きもほとんど見られない。だからといって漱石が『俗謬論』を読まなかったことにはならないが、材源として強く推すほどではないことになる。

上に引用した『俗謬論』の当該箇所に近いところに、もうひとつ『猫』と関係する記述がある。引用と同じ第 18 章に語られているハンニバルの逸話である（ブラウン全集では pp. 277-278）。ハンニバルがローマ領内に攻め入るためにアルプスを越えたときのことで、大きな岩を砕くために酢を使ったというものである。ブラウンはこの逸話について次のように書いている。

That Hannibal eat or brake through the Alps with vinegar may be

⁸ 飛ヶ谷（2002）所収論文「ハイドリオタフヒア、あるいは偉大なる暗闇」pp. 194-195 参照。

⁹ 飛ヶ谷氏は、漱石は『ハイドリオタフヒア』を五高教授時代に読んでから、『三四郎』執筆のころ、ほぼ 10 年ぶりにあらためて熟読したと推測しており、傍線はその再読のときのものとしている。前掲論文 p. 195 参照。

too grossly taken, and the author of his life annexed unto Plutarch, affirmeth only he used this artifice upon the tops of some of the highest mountains. For as it is vulgarly understood, that he cut a passage for his army through those mighty mountains, it may seem incredible, not only in the greatness of the effect, but the quantity of the efficient and such as behold them, may think an ocean of vinegar too little for that effect.

この逸話は『猫』第七章（第八章と同時に発表）に出てくる。語り手は猫である。

むかしハンニバルがアルプス山を超える時に、路の真中に当つて大きな岩があつて、どうしても軍隊が通行上の不便邪魔をする。そこでハンニバルは此大きな岩へ酢をかけて火を焚いて、柔かにして置いて、夫から鋸で此大岩を蒲鉾の様に切つて滞りなく通行をしたさうだ。主人の如くこんな利目のある薬湯へ煮だる程這入つても少しも功能のない男はやはり酢をかけて火炙にするに限ると思ふ。然らずんば、こんな書生が何百人出て来て、何十年かゝつたつて主人の頑固は癒りつこない。

（『全集』第一巻、pp. 297-298）

この話の典拠はリーウィウス『ローマ建国以来の歴史』21.37であり、ハンニバルが熱した岩に酢をかけてもろくするという方法を使ったことが述べられている。漱石の文章を見ると岩に酢をかけて火を焚いたと書いているが、ブラウンは火を焚いたとは書いていない。また、漱石の「鋸で切る」というのはリーウィウスにもない要素である。よって、ブラウンだけを参照しては第七章の記述はできない。鋸はともかく、「火を焚く」というのはリーウィウスに基づく伝承であり、何か他のものを参照しなければ書けない要素である¹⁰。もしハンニバルの逸話の材源がブラウンではない

¹⁰ ハンニバルの逸話の材源は、今のところ不明である。漱石蔵書のスミスの『古代辞典』にも記述がない。漱石文庫の書籍としては、J. Timbs ed., *The Book of Military Anecdotes*, London（出版年不明、「図書購入ノート」番号25、英国留学時代に購入）という本がタイトルからして材源の可能性を思わせるが、中身を見るとハンニバルの逸話は見つからない。同様に、T. & S. Percy ed., *The Percy Anecdotes*, London（出版年不明、「図書購入ノート」番号5、英国留学時代に購入）という逸話集も見てみたが見つからなかった。アイスキュロスの逸話もない。なお、この二冊には線引きも書き込みもなかった。

としたら、すぐ近くにあるのにアイスキュロスの逸話だけブラウンを使ったというのは考えにくいことである。よって、特にこの点からブラウンを材源と考えるのは難しいと判断する。

(4) バーネット『ギリシア劇』

ライオネル・バーネット (Lionel Barnett, 1871-1960) はイギリスのインド学者であり、ギリシア・ローマの研究者ではない¹¹。ただし、ケンブリッジ大学では古典語・古典文学でひじょうに優秀な成績を修めたとのことで、古典の知識は相当なものだったようである。大学ではサンスクリットも学んでおり、結局はこの分野の学者として活躍した。『ギリシア劇』は彼が大学で本格的に教鞭を執る前の著作であり、学生あるいは一般読者向けの概説書である (The Temple Primers というシリーズの一冊である)。序文を読んでも特に執筆の経緯はわからない。

アイスキュロスの逸話は第3章第1節、アイスキュロスの生涯を概説している箇所につされた注の中にある。彼の死の伝説は、その出所が謎であるため歴史家には興味深いものだという内容の注で、伝説については、アイスキュロスの死は鷲のせいであり、その鷲は彼の禿頭を石と誤り、甲羅を割るために亀をその頭の上に落とした、とごく簡潔に書いている。これも情報は少ないが、漱石の材源としては十分である。

このバーネットの本は漱石の「図書購入ノート」では 837 の番号になっている。購入日の記載がないため推測するしかないが、他に手がかりがないので飛ヶ谷 (2002) のいくつかの推測を利用させていただく。飛ヶ谷氏は、図書購入ノート 831 番の Meredith, *The Shaving of Shagpat* の購入を『猫』で文壇デビューした明治 38 年 (1905) 1 月前後と推測している (飛ヶ谷 (2002) p. 89)。また、850 番の Meredith, *Beauchamp's Career* の購入を明治 38 年夏ごろと推測している (同 p. 105)。番号は購入順になっているので、この 2 冊に挟まれたバーネット『ギリシア劇』の購入時期は明治 38 年の 1 月から夏の間と推測されることになる。

この書の漱石手沢本を見たが、該当箇所には線引きも書き込みもなかった。さらに全ページを繰ってみたが、線引き、書き込みは見つからなかった。漱石が読んだという確証もないわけである。そのため材源としての可能性は高いとは言えないが、この本を購入した時期が『猫』の第八章を執

¹¹ バーネットの情報は、E. T. Williams, H. M. Palmer ed., *The Dictionary of National Biography, 1951-1960*, Oxford U.P., 1971 による。

筆していた時期の少し前であるという事実は指摘しておきたい。

アイスキュロスの逸話と直接関係はないが、ギリシア劇とのつながりで漱石の『三四郎』（明治 41 年（1908）9 月 1 日～12 月 29 日「東京朝日新聞」に連載）の一節の材源について紹介したい。『三四郎』十二の一、三四郎が広田先生からギリシアの劇場の話を書くという件である。

先生はそれから希臘の劇場の構造を委しく話して呉れた。三四郎は此時先生から、Theatron [テアトロン], Orchêstra [オルケストラ], Skênê [スケーネ], Proskênion [プロスケニオン] など云ふ字の講釈を聞いた。何とか云ふ独乙人の説によると亜典 [アテン] の劇場は一万七千人を容れる席があつたと云ふ事も聞いた。それは小さい方である。尤も大きいのは、五万人を容れたと云ふ事も聞いた。入場券は象牙と鉛と二通りあつて、何れも賞牌 [メダル] 見たやうな恰好で、表に模様が打ち出してあつたり、彫刻が施してあると云ふ事も聞いた。先生は其入場券の価迄知つてゐた。一日丈の小芝居は十二銭で、三日続の大芝居は三十五銭だと云つた。三四郎がへえ、へえと感心してゐるうちに、演芸会場の前へ出た。（『全集』第五巻、p. 584）

いろいろと調べてみたところ、この箇所の材源はカール・マンツィウス（Karl Mantzius, 1860-1921）というデンマーク人の以下の著作（の英訳）にほぼ間違いないことが分かった。

Karl Mantzius (tr. by Louise von Cossel), *A History of Theatrical Art in Ancient and Modern Times* (vol. 1 The Earliest Times), Duckworth, London, 1903

これは漱石の蔵書にあるもので、全五巻の大著である¹²。その第 1 巻にギリシア劇についての章がある。ほぼ間違いないという理由として、まず同書 p. 116 以下の記述に orchestra, skene 等の説明があり、その長音記号が『三四郎』と一致している。『三四郎』の Theatron と Orchestra の a には長音記号が付いていないが、マンツィウスでも付いていない。e の上の長音記号が「ê」であるのも一致する。岩波書店版全集の『三四郎』の本文

¹² マンツィウスのこの本について漱石は明治 39 年（1906）10 月 10 日付若杉三郎宛書簡で言及しており、先日第 4 巻を注文したがまだ来ないと言っている（『全集』第二十二巻、p. 576）。第 4 巻の英訳の出版年は 1905 年である。なお、稿者はマンツィウスの五巻分すべて目を通したが線引きや書き込みは見られなかった。この例は、線引きや書き込みがないからといって漱石がその本を読まなかったということにはならないことをよく示している。

は手書き原稿に基づくものなので、漱石自身が e の上に山形の長音記号を付していることになる。わざわざ付けているのだから、漱石は何らかのものを参考にして書いたはずである。また、同書 pp. 149-150 の記述には入場料の説明がある上、収容人数を述べたところに 17,000 と 50,000 という数字がある。その典拠としてドイツ人である Doerpfeld の名前が挙がっているので、『三四郎』の「何とか云ふ独乙人の説によると」に合致する。

このマンツィウスの本には当然ながらアイスキュロスに関する記述はあるが、アイスキュロスの死の逸話は見あたらない¹³。

バーネットの『ギリシア劇』にも、もちろんギリシアの劇場について書かれた箇所がある (Theatron: p. 71, Orchestra: p. 71, Skene: p. 73, Proskenion: p. 75)。しかし、長音記号が異なる。例えば Theatron と Orchestra の a には長音記号が付いている。収容人数については、17000 という数字はバーネットにもあるが (p. 94)、5 万人という話や、入場券、入場料の話は見あたらない。

もし、この『三四郎』の箇所がバーネットを参考にして書かれたものだということが言えたとしたら、漱石はバーネットの本をある程度熱心に読んでいたことになり、アイスキュロスの逸話もバーネットで知ったという可能性が高くなるであろう。しかし、上述のとおり、漱石が参照したのはマンツィウスであって、そのようなことはないのである。

(5) スミス編『古代辞典』

「スミスの『古代辞典』」とは便宜上そう言っているもので、ウィリアム・スミスは *A Dictionary of Greek and Roman Antiquities* (1842), *Dictionary of Greek and Roman Biography and Mythography* (1849), *Dictionary of Greek and Roman Geography* (1857) という三種類の古代辞典を編纂した。もともとは全部で五分冊にもなる大きなものであるが、その後そこから様々な縮約版が作られたようで、漱石蔵書の *A Classical Dictionary of Greek and Roman Biography, Mythology, and Geography*

¹³ そもそもマンツィウスの本（少なくとも第 1 巻）を購入した時期は『猫』第八章執筆（1905 年の秋頃）の後であるように思われる。この本は漱石の「図書購入ノート」に載っていて 897 番となっている。購入時期を特定するのは難しいが、その直前の番号である 894 番の Farmer and Henley, *A Dictionary of Slang & Colloquial English* の出版年は 1905 年である。これらの書を 1905 年の秋頃までに入手したとすると、*A Dictionary* の方はかなり迅速に入手したことになり、あまり現実的ではない。

という本も、マリンディン（Marindin）という人物が編んだ縮約版の一つである。これは一冊本で原典と比べれば大幅に規模が小さくなっているが、それでも千ページ余りの本である。漱石の「図書購入ノート」では 87 の番号がついており、英国留学中の 1901 年 3 月 5 日に購入したものと推測されている（岡（1981）pp. 204-206）。新版『漱石全集』の注解が挙げている『古代ギリシア・ローマ伝記神話地理辞典』とはこれのことである。そこには当然ながら「アイスキュロス」の項があり、注解が述べるように、その中には鷲と亀の逸話も記されている（p. 28）。短いのでその文章を挙げておく。

The well-known story of his death, that an eagle, mistaking the poet's bald head for a stone, dropped a tortoise on it to break the shell, is represented on a gem, which Baumeister thinks was copied from a relief, and suggests that the story came from the relief and was fitted on to Aeschylus. It was held to fulfil an oracle by which Aeschylus was to die by a blow from heaven.

これも材源としての情報は十分であろう。

この辞典の手沢本を調べたところ、当該箇所には線引きや書き込みはなかった。辞典全体でも漱石の書き込みはほとんどない。すべてのページを繰ってみたが、二か所に下線が引かれているのを見つけただけであった¹⁴。漱石が辞典を通読したとは考えがたいが、辞典を「参照」していた可能性はあることはわかる。

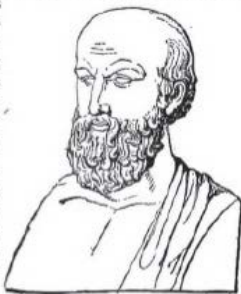
もうひとつ漱石がこの辞典を参照していたことをうかがわせるものがある。『猫』第二章の迷亭の手紙に「依て此間中よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を涉獵致し居候へども」という一節がある。「ギボン」は『ローマ帝国衰亡史』のエドワード・ギボン、「モンセン」は『ローマ史』のテオドール・モムゼンのことであろうから、それと並んで挙げられ

¹⁴ 参考までに、下線のある箇所を紹介する。p. 444 の“*Io*”の項の *Hera then tormented Io with a gad-fly* という一節の下。p. 611 の“*Nymphae*”の項に数カ所。*Oceanides, Naiades* といったニンフの種類を表す単語の下に引かれている。稿者は『漱石全集』の索引などを使って、漱石がこれらの神話について調べた理由を探ろうとしたが、結局手がかりは見つからなかった。なお、この手沢本は漱石が古書で購入したはずであるから、下線は元の持ち主が引いた可能性もあることを断っておく。

ている「スミス」はこの辞典のことを指すと考えるのが自然であろう（ただしギボンとモムゼンの著作は現在の漱石文庫の中にはない）。

言えるのはそこまでで、アイスキュロスについては何ら決定的なことは言えない。ただし、この縮約版の辞典には注目すべき特徴がある。それは原書にはないイラストが豊富に挿入されていることである。アイスキュロスの項目にも二つ挿入されている。ひとつはアイスキュロスの胸像（p. 27：図1）、もうひとつは鷲が彼の頭上に亀を落とさんとしている場面（p. 28：図2）である¹⁵。

Aeschylus (*Alaxólos*). 1. The great tragic poet, was born at Eleusis in Attica, B.C. 525, so that he was thirty-five years of age at the time of the battle of Marathon, and contemporary with Simonides and Pindar. His father Euphorion was probably connected with the worship of Demeter, and Aeschylus himself was, according to some authorities, initiated in the mysteries of this goddess. At the age of twenty-five (B.C. 499), he made his first appearance as a competitor for the prize of tragedy against Pratinas, without being successful. His chief rival at this period was Phrynichus. He fought, with his brothers



Bust of Aeschylus.

for his two journeys to Sicily do not follow a defeat. Others said it was because he had been defeated by Simonides in an elegy on those who died at Marathon. If this was so, it is strange that he should have gone to the court



Aeschylus. (From a gem.)

of Hiero only to meet Simonides there after all. Others said that it was because he had divulged the mysteries; others (and this, at any rate, must refer to his second visit to Sicily) because the alarm caused to women and children by the chorus of Furies had raised bad feeling against him. Whatever may have been the cause of his earlier visit to Hiero, the most likely account of his final departure from Athens is that he was disheartened by the failure of his attempt to support the power of

図1 アイスキュロスの胸像

図2 アイスキュロスと鷲

漱石が何かの調べ物の際にこのページをたまたま見たとしたら、このイラストが彼の興味を引き、そのままアイスキュロスの項を読んだという可能性があるのではないだろうか¹⁶。

¹⁵ この場面のイラストには“From a gem”と書かれている。この gem とは、ジェイムズ・タッシー (James Tassie, 1735-1799) のコレクションの一つで、ヴィクトリア&アルバート美術館に所蔵されているカメオであると思われる。その画像はオクスフォード大学の“CLASSICAL ART RESEARCH CENTRE and THE BEAZLEY ARCHIVE”というサイトで見ることができる (gem の番号は 9923)。

¹⁶ 塚本 (2009) はこのイラストの存在を強調し、アイスキュロスの逸話の材源はスミスの辞典であると断定している (pp. 6-7)。ただし、ここでは材源の他の可能性は考慮されていないようである。

以上が漱石の蔵書を調査した結果である。もちろん、材源をどれか一つと考える必要はない。また、材源が蔵書以外にある可能性も否定できない。「蔵書中にあるとしたら」という前提での結論としては、スミスの『古代辞典』の可能性がいちばん高いのではないだろうか。該当箇所には線引きや書き込みがないという点ではバーネット『ギリシア劇』も同じである。しかし、『古代辞典』のほうは少なくとも漱石が参照していた証拠がある。なにかを調べているときにたまたまアイスキュロスのイラストを見て興味を持ち、その項目の記述を読んだという可能性が、稿者にはいちばん高いと思えるのである。

II アグノディケーの逸話

材源を見つけるということにおいて、アイスキュロスの逸話と好対照をなすものがあるので紹介したい。『猫』第六章（明治 38 年（1905）10 月 10 日発行の『ホトトギス』第九巻第一号に発表）に次の一節がある。逸話の話し手は迷亭である。

「……ことにあの色の黒い女学生が一心不乱に体操をして居るところを拝見すると、僕はいつでも Agnodice の逸話を思ひ出すのさ」と物知り顔にしやべり立てる。「又六づかしい名前が出て来ましたね」と寒月君は依然としてにやにやする。「Agnodice はえらい女だよ、僕は実に感心したね。当時亜典〔アテン〕の法律で女が産婆を営業する事を禁じてあつた。不便な事さ。Agnodice だつて其不便を感じたらうちやないか」「何だい、その一何とか云ふのは」「女さ、女の名前だよ。此女がつつら考へるには、どうも女が産婆になれないのは情けない、不便極まる。どうかして産婆になりたいもんだ、産婆になる工夫はあるまいかと三日三晩手を拱いて考へ込んだね。丁度三日目の暁方に、隣の家で赤ん坊がおぎあと泣いた声を聞いて、うんさうだと豁然大悟して、夫から早速長い髪を切つて男の着物をきて Hierophilus の講義をきゝに行つた。首尾よく講義をきゝ終せて、もう大丈夫と云ふ所で以て、愈産婆を開業した。所が、奥さん流行りましたね。あちらでもおぎあと生れるこちらでもおぎあと生れる。夫がみんな Agnodice の世話なんだから大変儲かつた。所が人間万事塞翁の馬、七転び八起き、弱り目に祟り目で、つい此秘密が露見に及んで遂に御上の御法度を破つたと云ふ所で、重き御仕置に仰せつけられさうになりました」「丸で講釈見た様です事」「中中旨いでせう。所が亜典の女連が一同連署をして嘆願に及んだから、時の御奉行もさう木で鼻を括つた様な挨拶も出来ず、遂に当人は無罪放免、是からはたとひ女たりとも産婆営業勝手たるべき事と云ふ御布令さえ出て目出度落着を告げました」（『全集』第一巻、pp. 253-254）

最近の女性は何事にも男性に負けない、近所の女学校の生徒が体操しているのを見ると、アグノディケーのことを思い出す、という文脈でこの逸話が挿入される。逸話の典拠はヒュギヌス『神話伝説集』である。問題の逸話は第274話の「誰が何を発明したか」と題された文章の中に出てくる。古代においてアグノディケーなる女性への言及はこれのみであり、他には見られない。ヒュギヌスの該当箇所を拙訳を挙げておく¹⁷。

古の人々の間には助産婦というものがいなかった。それで女性たちは羞恥心のために命を落とした。というのも、アテーナイ人は奴隷や女性に医術を学ばせないようにしたからである。アグノディケーという少女が医術を学びたいと熱望し、熱望のあまり髪を切り落とし男の身なりをして、ヘーロピロスという人物のところへ弟子入りした。彼女は医術を修得したが、ある女性が下腹部の痛みで苦しんでいることを聞くと、その女性のところへ赴いた。女性は彼女を男だと思って身を委ねることを拒んだので、彼女は下着を持ち上げて自分が女であることを示した。そのようにして彼女は女性たちを治療した。男の医者たちは自分たちが女性に呼ばれないことに気づくと、アグノディケーを非難しだした。この男はひげも生えておらず、女たちをかどわかす者であり、女たちは病気のふりをしているのだと彼らは言った。そこでアレイオパゴスの法廷が招集され、男たちはアグノディケーを非難しはじめた。アグノディケーは彼らに向かって下着を持ち上げ自分が女性であることを示した。すると男の医者たちはもっと激しく非難した。そのため、主だった女性たちが法廷に集まってきてこう言った。「あなたたちは夫ではなく敵です。私たちの身の安全に資するものを考案してくれた女性を、あなたたちは糾弾しているのですから」。それでアテーナイ人は法律を改正して、自由人の女性が医術を学べるようにした。

漱石はどのようにしてこの逸話を知ったのだろうか。もちろん直接ヒュギヌスを読んだはずはない。ラテン語原文を読んだとは考えられないし、翻訳書で読んだ可能性もない。ヒュギヌスの『神話伝説集』は近年になって現代語訳がいくつか出版されるようになったが、おそらく最初の英訳が出版されたのは1960年だからである(Mary Grant ed. and tr., *The Myths of Hyginus*, University of Kansas Press)。翻訳書ではなく、何らかの近代の作品の中でこのアグノディケーの話が引かれているのを読んだと考えるのが自然である。実は、その出所はある意味はつきりわかっている。

¹⁷ 翻訳に用いたテキストは、P. K. Marshall ed., *Hygini Fabulae*, München/ Leipzig, 1993 (Teubner) である。

漱石は様々な書物から抜き書きをした紙片を残しており、それが『漱石全集』に翻刻されてまとめられている。『全集』第十九巻の断片二一（紙片一葉、明治 37, 8 年頃）は次のようなものである。

○The following story is told by Ovid's friend and Augustus' freedman Hyginus (no very good authority indeed. Fab. 274, 'Of Inventions'). There was a law at Athens that no woman should practise midwifery. But a certain lady named Agnodice, perceiving the inconvenience of the present custom, cut off her hair, and disguising herself as a man, went to the lectures of Hierophilus, and subsequently attended ladies. The faculty, getting wind of this, trumped up an accusation against her in Areopagus, and when Agnodice had cleared herself of the scandal, they alleged the then existing law against obstetrics. But the court was so much moved by a deputation of Athenian matrons, that they not only acquitted Agnodice, but made it lawful for ladies (ingenuae) to study medicine.

（『全集』第十九巻、pp. 160-161）

これが『猫』の材源であることは明らかであろう。このような抜き書きが残っているかぎり、材源はその元の本以外にはあり得ない。それでは、その元の本とは何であろうか。抜き書きには何も記されていない。抜き書きに対する全集の注解（p. 466）でも「出典未詳」とされている。

もし十何年か前であつたら調査はここで行き止まりである。よほどの幸運に恵まれない限り、この典拠を突き止めることはできなかったであろう。しかし、現在はインターネット上の情報が充実している。なんらかの検索サイトを使い、上の文章の適当な一節を入力して検索してみれば、典拠はたちどころにわかる。以下のものである。

Christopher Wordsworth, *Social Life at the English Universities in the Eighteenth Century*, Cambridge University Press, 1874

抜き書きはこの書の pp. 328-329 からである。クリストファー・ワーズワース（1848-1938）は詩人ウィリアム・ワーズワースの甥の息子にあたる。この逸話が引かれる文脈は次のようである。イギリスの大学においては、女性が大学で学ぶのを許可することについて 18 世紀には動きがなかった。しかし他の大学ではそのような例の記録がある。ここでワーズワースはある教授の著作を引用する。ボローニャ大学では古くから女性が聴講したり女性が教鞭を執ったりした例がある。ある女性は解剖学を講じたという。その後にアグノディケーの逸話が挿入されている。そこにはなんの説明もないが、

ワーズワースは古代においても女性が学問に関わっていた例があるということを示したかったのであろう。

さて、漱石はなぜこの本を読んだのであろうか。この本は現在の漱石文庫にはない。明治 37, 8 年頃という時期と、18 世紀の英国ということからすぐに思い浮かぶのは、漱石の『文学評論』である。『文学評論』という本は明治 42 年 (1909) 3 月の出版であるが、元になっているのは漱石が明治 38 年 9 月から 40 年 3 月まで東京帝国大学で行った講義である。この講義は「十八世紀英文学」と題するもので、スウィフト、ポープ、デフォーなどを論じている。それら個別の作家を論じる前に 18 世紀英国の一般的状況を紹介する部分がある (本では第二編「十八世紀の状況一般」)。上記のワーズワースの本はこの部分のために参考にしようとしたのではないだろうか。

『文学評論』の第二編の終わりには、18 世紀の社会風俗を研究するために参照すべき本として六冊 (分冊の分は数えない) の書が挙げられている (『全集』第十五巻、pp. 172-173)。その中にワーズワースの本は入っていない。また、その六冊のうち二冊は現在の漱石文庫にはない。おそらくその二冊は図書館から借りたものであろう¹⁸。ワーズワースの本も同様に図書館から借りたものではないだろうか (ただし、ウェブ検索によると東京大学の図書館にはこのワーズワースの本は所蔵されていない)。

『猫』第六章の掲載は明治 38 年 (1905) 10 月 10 日発行の『ホトトギス』であるから、それは「十八世紀英文学」の講義を始めた時期に当たる。講義のために読んでいた本の中で興味を引く記述を見つけてそれを抜き書きし、『猫』の材料に使ったとすれば話は合うだろう。もっとも、女性の大学への受け入れという話題は『文学評論』では扱われていない。

おわりに

漱石は古代ギリシア、古代ローマをどのように捉えていたのか。これは興味深い問題ではあるが、問題が大きすぎてとてもここでは扱えない。少なくとも、西洋文化の背後には広大な古代ギリシア・ローマ文化の存在があることは認識していたであろう。今回とりあげたいいくつかのギリシア・ローマの逸話をとおして、漱石のギリシア・ローマ観の一端のようなものがうかがえればよいのだが、それもむずかしそうである。このような問題を考える際、逸話が挿入される文脈というものが必要であろう。アイスキュロスの逸話の場合は、文脈からはなにも言えそうにない。つまり、面白半分には挿入した印象を受ける。アグノディケーの場合は、文脈に意味がありそうであるが、「漱石の女性観」といった大きすぎる問題をはらんでいるので、ここで議論するのがむずかしい。そこで、

¹⁸ 二冊のうち Trail 編集による *Social England* という本 (全六巻) は東京大学に三セット所蔵されており、ウェブ検索ではそのうちの一セットのコメント欄に「一高図書」とある。

本稿の結びとしては、スミスの『古代辞典』への言及箇所について少々考えてみたい。

すでに述べたように、『猫』第二章の「依て此間中よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を渉猟致し居候へども」という言葉は、迷亭の苦沙弥先生宛の手紙の一節である。これが置かれている文脈は、簡単に言えば次のとおりである。迷亭は苦沙弥に孔雀の舌をご馳走したいという。しかし、苦沙弥はふだんから胃弱であるし、迷亭もこのところ胃弱になりそうである。その点をなんとかするためには古代ローマ人を見習うのがよい。ローマ人は日に何度も宴会を行うため、食後に必ず入浴し、その後なんらかの方法で食べたものをすべて嘔吐して胃を空っぽにしてから次の宴会にのぞむのである。迷亭は、自分は西洋の事情に通じているので、ぜひ嘔吐のための「既に廃絶せる秘法」を発見して社会に貢献したいという。その後に件の一節がくる。「ギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を渉猟致し居候へども未だに発見の端緒をも見出し得ざるは残念の至に存候」。これらの学者の著述を渉猟したが、残念ながら「秘法」はまだ発見できないというのである。迷亭は、自分は思い立ったことは成功するまで諦めない人間であるといい、それゆえ孔雀の舌をご馳走するのはその嘔吐法を発見してからにしたいという。このようにして迷亭は苦沙弥をからかったのである。

漱石がギボン、モムゼン、スミスの名前を古代ローマに関する浩瀚な著作の代表として挙げているのは明らかである。しかし、そのような大層な本を読まなくても、古代ローマのことをある程度知っている人間ならば、迷亭の言う「秘法」とはなにかの棒や鳥の羽根などをのどに突っ込むことだとすぐにわかるであろう。漱石はわざとそれを「秘法」として伏せて冗談にしているのである。塚本（2009）はこの箇所に注目し、「孔雀の舌」や「嘔吐法」といった要素の材源について詳細な論考を行っている。この研究によれば、主たる材源はヘンリック・シェンケヴィッチの『クオ・ヴァーディス』（*Quo Vadis*, 1896）である。漱石はこの作品の英訳を留学中に購入し、かなり熱心に読んでいたことがわかっている¹⁹。塚本氏の結論のみ簡単に紹介すると、「孔雀の舌」は『クオ・ヴァーディス』の中では「フラミンゴの舌」であり、ある人物が胃におさめていたのを嘔吐する場面がある。漱石はそこからヒントを得たようである。当時、日本でフラミンゴを知る

¹⁹ 飛ヶ谷（2009）参照。この論文は主に漱石の『それから』のいくつかの要素が『クオ・ヴァーディス』からの直接的影響によるものであることを論じている。また、明治期に始まる『クオ・ヴァーディス』の日本での受容については八木（1987）も参照。

人はほとんどいなかったもので、漱石が孔雀に変えたものと思われる。『クオ・ヴァディス』で「嘔吐法」について述べるのは登場人物のペトロニウスである。食事の後に胃を軽くするために、他の人は棒や鳥の羽根を使うが、自分はネローの詩作品を思い出せば吐き気を催すのでその代わりになるというのである。おそらく塚本氏の結論は妥当なものであろう。この説にしたがうなら、迷亭が発見することになる「秘法」とは吐き気を催すような文学作品なのかもしれない。漱石がそこまで意図していたと考えるのも楽しいことである。

さて、迷亭の手紙について上では触れなかった要素がある。迷亭が「嘔吐法」を見つけるのは、苦沙弥のためだけではない。実は日本国民のためでもある。日露戦争に勝利した日本国民はローマ人にならって入浴嘔吐の方法を学ぶべき機会に至っている。さもないとせつかくの大国民が近い将来胃病患者になってしまう。だから自分がその「秘法」を発見して日本社会に貢献するのだと、迷亭は言うのである。解釈のしかたは様々あると思うが、これは日本の近代化のことを言っているのだと取るのはそれほど的外れではあるまい²⁰。漱石は講演『現代日本の開化』（明治44年（1911）8月）の中で、日本の近代化は外発的なものなので皮相的で不自然なものにならざるを得ないと述べ、それでも近代化の道を進むしかないと主張している。無茶なことではあっても、次から次へとたいへんなスピードで西洋のものを胃に詰め込まなければならないのである。そんなことをしていれば胃病になる。『現代日本の開化』ではそれを「神経衰弱になる」と言っている。こうした問題点に気づいてすらいない日本人に対して警告を発しているのである。しかしながら、漱石自身、ではどうしたらいいのかと訊かれても名案はないと言っている。「神経衰弱にならない程度に内発的に変化していくのがよい」というような体裁のよいことしか言えないという積極的な具体策は持っていないということである。実際に嘔吐するのならば、その方法は簡単である。しかし、近代化の痛みを緩和するための方法はそうではない。そのため、『猫』ではその方法は「秘法」になっているのである。その秘法について「ギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を渉猟致し居候へども未だに発見の端緒をも見出し得ざるは残念の至に存候」というとき、この一節をどのように見るべきであろうか。冗談であることは間違いないし、三人の著作を渉猟しても答えは見いだせなかったという結論である。そうではあっても、古代ギリシア・ローマというものを、なにか情報の宝庫のようなものと認識していたからこそ、漱石はここでこの三人を

²⁰ 英国留学時代の明治34年3月16日の日記にも、近代化を消化のイメージで捉えている記述がある。日本は30年前に無理矢理起こされる形で目覚めたため、現在も本当に目覚めているとは言えない。「只西洋カラ吸収スルニ急ニシテ消化スルニ暇ナキナリ、文学モ政治モ商業モ皆然ラン」（『漱石全集』第十九巻、p. 66）。

引き合いに出したのではないか。そのように考えるのは西洋古典学研究者の都合のよい想像であろうか。

参考文献

- 岡三郎（1981）『夏目漱石研究』第一巻，国文社（「図書購入ノート」の翻刻を含む「イギリス留学前半の漱石のこころの明暗」を所収）
- （1986）「新資料・自筆『蔵書目録』からみる漱石の英国留学—Malory 購入時期などの確定」，『英文学思潮』，青山学院英文学会，pp. 1-19
- 塚本利明（2009）「食材としての孔雀—漱石における想像力の一面」，『人文科学年報』39，専修大学人文科学研究所，pp. 1-26
- 中務哲郎（1996）『イソップ寓話の世界』，ちくま新書
- （2011）「漱石とギリシア奇談」，『図書』753号，岩波書店（のちに『極楽のあまり風』（ピナケス出版，2014）に所収）
- 飛ヶ谷美穂子（2002）『漱石の源泉』，慶應義塾大学出版会（「漱石自筆図書購入ノート 翻刻」を所収）
- （2009）「《趣味の審判者》の系譜—ペトロニウスから代助まで—」，『比較文学』52，日本比較文学会，pp. 137-151
- 八木光昭（1987）「ポーランド文学が日本近代文学に与えた影響」（板東宏編『ポーランド入門』（三省堂，1987）に所収）
- 淮陰生（1995）『完本 一月一話—読書こぼればなし—』，岩波書店（「アイスキュロスと亀と漱石」を所収）